●マイハート
◇“聞く”という体験　小原乃梨子……3
●教育のひろば
◇緑のカーテンで生活も心も豊かに　緑のカーテン応援団……4
●連載／教育一語
◇⑨「習は，山を移すことである」
◇⑩「博学・審問・慎思・明弁・篤行，五者，その一を廃しても学にあらざるなり」
新宮弘識……6
●特集 Lesson on
◇道徳教育と内容項目　毛内嘉威……8
◇理想を胸に　渡邊達生……12
◇宿泊学習と道徳の時間とを関連させた授業　高野力郎……16
●新連載
◇体験を生かして　松田憲子……20
●新連載
◇「人間関係づくりの演習と道徳①」　土田雄一……21
●新連載　授業参観におすすめの道徳授業
◇高学年だからこそ家族愛　竹井秀文……22
●新連載／ひと味違った授業をするために
◇道徳ノートの活用　パート１　加藤宣行……26

本文中の勤務校は平成23年４月現在のものです。

NPO 法人緑のカーテン応援団▶2007年に NPO 法人の認証を取得し，緑のカーテンの実践者への支援，普及啓発活動，情報提供，フォーラム開催などを実施する。緑のカーテンの価値と可能性を全国各地に発信している。現在，東日本大震災による仮設住宅３万戸に「緑のカーテン」を設置するため「仮設住宅×緑のカーテン」プロジェクトを展開している。
応援団 HP http://www.midorinoka-ten.com/
「仮設住宅×緑のカーテン」プロジェクト
http://midorinocurtain-kasetsu30000pj.jimdo.com/

新宮弘識先生▶東日本大震災で，若い人々にみられる共助の心。人間が本来持っている人間のよさがふき出したのではないか。日本は大丈夫だとうれしくなる。このようなすばらしい心を子どもたちに伝えたい。

毛内嘉威先生▶博士（学術）。弘前大学教育学部附属小学校（主幹教諭）を経て，現在は青森県総合学校教育センター義務教育課に勤務。小学校学習指導要領解説道徳編（平成20年８月）・小学校道徳読み物資料集（平成23年３月）作成協力者。著書に『学級担任が自信を持って行う道徳教育』（学事出版）等。

高野力郎先生▶本年度，教職人生で初めて担任を離れました。その分，学校中の子どもたちと触れ合う機会が増えると共に，様々な先生方の指導に触れ，勉強になっています。今年は，これから日本，世界においてどのような学力が必要とされていくのかを考えていきたいと思っています。

渡邊達生先生▶陶芸を始めて２年。当初，苦労しましたが，今，ろくろをまわして，粘土から形をつくりだすことにおもしろさを感じています。今まで気にもとめなかった食器の形，絵付け，色合いに，とてもひかれるようになりました。自分で苦労することによって，おもしろさや，関心は広まるのだと，当たり前のことに，いまさらながら感じ入っています。別件ですが，『心を育てる日記』を作成しました。学級の人数分，無料でお届けできます。見本送ります。

松田憲子先生▶昨年に続き，今年も６年の担任です。谷津干潟に沈む夕日の美しさは変わらないのですが，昨年と大きく状況が変わった今年，「自分にできること」を意識させ，卒業を目指して行きたいと思います。

土田雄一先生▶教育センター２年目です。教職員研修体系を再構築し，若い教員の研修に力を入れています。勤務時間外に行っている「夕やけ講座」の「教師塾」（三回）の担当になりました。楽しみです。

竹井秀文先生▶岐阜大学教育学部附属小学校に勤めて10年が経ちました。本年度は，研究主任となり６月25・26日に開催する研究大会に向けて全力投球中。研究大会は，土日ですので全国のみなさん，ぜひ岐阜へお越しください。（飛騨高山や白川郷もまっています。）

加藤宣行先生▶
筑波大学附属小学校教諭／淑徳大学講師
日本道徳基礎教育学会事務局長
使えるベーシック研究会常任理事
光文書院『ゆたかな心』編集委員

マイハート

“聞く”という体験

声優・俳優　小原乃梨子

父は弁護士でしたが芸能も好きで，六法全書の隣には落語の本がいっぱい。父に連れられて柳橋にも行って，いろいろな芸事にも触れてきましたね。母とは教会で讃美歌をうたったりして。父から日本の，母から洋風の文化，という感じでした。父は，本はいくらでも買っていいという方針でした。本は心を潤沢にします。「少年倶楽部」といった兄や姉が買った本も読ませてもらいました。

集団疎開も経験。疎開先ではいじめも体験しました。疎開先から帰ってきたら一面焼け野原。阪神淡路大震災直後，慰問に行った時，被災地で同じような焼ける臭いを感じました。今回の震災もそうだったのではないかと心がいたみます。

小学生のころは「虹の橋」という児童劇団にいました。仕事で新橋まで通っていましたが，そこで耳にした「ドリームズ・カム・トゥルー」という曲が私の一生のテーマ曲になりました。（歌手の）ドリカムよりずっと前の話ですよ（笑）。

進学して芸能界からしばらく離れましたが，学校でも演劇をしてね。学校演劇向けの台本がないから，本は先生が書いてくださって。それと女子校だから裏方も女子。重たいものを舞台の上の方まで一生懸命持ち上げていました。

そして女優になりました。やがて「吹き替え声優」という仕事が生まれましたが，当時，まったく新しく誰もやったことがなかったから，テレビ女優や新劇の若手が集められて。生放送の時代だから現場はバタバタしていて，みんなスポーツ感覚でしたね。誰かがくしゃみをしたら，次の人が台詞を言うことができない。そんな状態だけどみんな一生懸命でした。劇場洋画の吹き替えは，テレビ朝日の日曜洋画劇場が先駆けて，初めのうちは同じ役者でも各局で違う人があてていましたが，この声はこの人ってだんだんと固定されてきてね。オードリー・ヘプバーンの池田昌子さんとか……。池田さんは同じ小学校の３級下で，そして同じ仕事をするなんて本当に不思議な縁です。放送関係のいろいろな仕事をしていましたが，子どもが生まれてからなかなか地方での仕事には行けなくなりました。そのため吹き替えの仕事がだんだん増えてきて，そのままそちらが主となってきました。

そして，今度はアニメーション。1980年前後は「宇宙戦艦ヤマト」などでアニメ声優の大ブーム。日劇でのイベントで劇場を取り囲むようにファンの方の列ができたくらい。私の名前が入ったたれ幕も出ていたので，「李香蘭（りこうらん）みたいね」と母がうれしそうに笑っていたことを思い出します。テレビの生放送の時代があって，その頃からの作り手たちの思いが脈々と生き続け，アニメもみなさんに認知され今のアニメブームへとつづきます。そういった受け継がれる思いを忘れないようしていきたいです。

読み聞かせで大事なこと。話を聞くときはまず心の耳で聞きます。自己を開放して聞くことが大事です。例えば，山に行っても海に行っても静かに音を聞いてほしい。母の膝の上で抱っこされて絵本を聞いたのが，私の読み聞かせの原体験です。抱っこされながら聞こえる母の声，香水の匂い，前にある絵。五感で心と言葉を感じました。私は読み聞かせをするとき，まず作家の心の中に飛び込んで行きます。読み手が五感で感じ，聞き手に伝える，そう思っています。名作と言われる作品は多くの目に洗われ，地層のように積み重ねられています。いい作品を朗読でつなげていきたいですね。

言葉は使い方によっては刃物にもなります。でもこの「言葉」によって私たちはソクラテス，アルキメデスといった何千年も前の人の考えを知ることもできます。音だけだったら愛もただの「ア」と「イ」。言葉は記号だけど，その意味は人間が作っていきます。たくさんの情報，言葉を，食べて飲んで咀嚼するように，自分自身で整理し分別しながら身に付けていく。そうやって上手に聞けるようになると意見の言い方も上手くなってきます。

未来少年コナン・ドロンジョさま……。そして，のび太くんは26年の時を重ねました。こうやってみんなに愛されるお仕事をしてきて，しかも，この仕事が天職となっている。私はすごく幸せな例なのだと思っています。（談）

東京都出身。ドラマ出演の傍ら，洋画吹き替え・アニメなど声優としても活躍。2000年「小原乃梨子朗読研究会」「おはなしフェアリーズ」を発足し，読み聞かせなどにも力を注ぐ。

緑のカーテンで生活も心も豊かに

ＮＰＯ法人　緑のカーテン応援団

夏に向けて例年以上に「節電」の呼びかけが増えている。その中でも「緑のカーテン」は園芸店の苗やネットが品薄になるほど，多くの家庭で節電対策として取り組まれている。

ＮＰＯ法人緑のカーテン応援団は，2008年に「第１回全国緑のカーテンフォーラム」を沖縄県那覇市で開催して以来，東京都板橋区，山梨県甲府市，京都府京都市でフォーラムを開催してきている。また，群馬県館林市をはじめ，各地の「緑のカーテン講習会」で講師を務めてきた。そこでは「節電」としての緑のカーテンを広めていたわけではない。それでは，応援団が伝えてきた緑のカーテンの魅力とは何であろうか。

イベントで出会う方々は皆さんとても緑のカーテンを楽しんでいらっしゃる。緑のカーテンは「楽しく」「おいしく」「涼しく快適」エアコンを使わないので「体にやさしく」「お財布にやさしい」。そして，気が付いてみると「地球にやさしい」暮らし方になっているのである。はじめから，地球温暖化防止のために，節電のために進めていくものではないのである。だから，緑のカーテンを通して会う方々は，みな楽しそうに語るのである。「夜帰宅して，１日のうちに伸びた蔓を見るのが好き。」「始めのうちは小さかった実が大きくなっていくのが楽しみ。」「蔓に話しかけている。」

さて，エアコンはスイッチ一つで外の世界を閉め出してしまう。外との関係を断ち切ることで快適性を得ているのである。現在の建物の多くはコンクリートに囲まれた建物を外からの環境を断ち切り内側の快適空間をエアコンによって作り出しているのである。それに対して緑のカーテンは窓を開けて，自然を上手に取り入れることで，快適性を手に入れる。よしずやアサガオで西日をさえぎり，植物の手入れを楽しむ文化があった江戸時代の知恵と通じるものがある。

学校でも緑のカーテンは広まってきている。学校で緑のカーテンを進める場合にはどのような教育的効果があるのだろうか。一つ目の教育的効果として住まい方の工夫の体得が挙げられる。多くの自治体で学校にエアコンを導入している今，スイッチ一つで室内環境を整える住まい方を子どものころから当たり前にしてしまってもよいのだろうか。スイッチ一つ入れる前に自然の力を取り入れた住まい方の工夫に気がついて欲しい。また，二つ目の教育的価値は自然や人とのかかわりである。異年齢の子や親以外の大人とかかわる機会の少なくなった，今の子どもたち。いわば外との関係を断ち切る，“エアコン”的な社会環境があちこちに準備された世の中だ。緑のカーテンを通して，子どもたちは，自然を取り入れた快適な住まい方の価値を感じ，たくさんの人や生きものとかかわり，外へ外へと関係を開いていく。その価値との出会いやかかわりによって子どもたちの心の豊かさは培われていくのである。

そんな例として板橋区立高島第五小学校と練馬区立富士見台小学校の子どもたちの姿を紹介したい。

高島第五小学校では毎年，４月のスタートの授業で「土って何だろう」という学習を行う。一握りの土のなかに数億もの微生物が存在すること，その微生物が枯れた草木を分解し，長い年月をかけて土は作られていることを学ぶ。１cm の厚さの土ができるのに，300－400年かかるそうだ。30 cm だと１万年もの年月がかかる。そうしてできた貴重な「土」や，その中で生きるミミズの役割，堆肥置き場で見つけたヤモリの生活……「ミミズは嫌い」「土は汚い」と思っている子どもたちにとっては，ちょっとビックリ，興味津々な話だ。そして，土の存在はかけがえのないものへと変化していく。土作りの作業を終えた後，毎年こんな光景を目にする。花壇の土を入れ替えるために，ブルーシートの上に新しい培養土や腐葉土を広げてかき混ぜる作業をしたときの話である。作業後花壇からこぼれている土を丁寧に集める子どもたちの姿である。「何をしているの？」と問いかけ

板橋区立高島第五小学校

ると，「花壇に戻すに決まっているでしょ！」子どもたちにとって，土が命のすみかとして感じられたのであろう。

土についての学びの後は，毎日たっぷり水やりをする。お気に入りの苗に「ジョン」「ヘッチーちゃん」など名前を付け，蔓の誘引や観察を行う。ヘチマは夏場になると一日に45cm も伸びることもあり，子どもたちは植物の生命力を実感する。

また，雨どい会社の方にゲストティーチャーに来ていただき，水は恐竜のいた時代から循環していることや雨水の大切さについて学ぶ。

夏には，１階の花壇から４階ベランダの天井まで緑の葉でおおわれる。収穫したゴーヤーを給食で食べたり，沖縄出身のゲストティーチャーにゴーヤーやヘチマを食材にした調理実習を行ったりした。夏の暑い時に，温熱環境の学習を行い，校庭やアスファルトからの放射熱が室内にもたらす影響や，緑のカーテンの内側のひんやりした涼しさを体感する。それによって緑のカーテン効果を体感的に学習するのである。

愛情をこめて育てたヘチマの「緑のカーテン」は11月になっても元気なほどである。ネットをはずすのに，まだ青々と葉が茂り，実もついている蔓を切る時，子どもたちは「ありがとう」「さようなら」と語りかけながら寂しさをこらえてはさみを入れる。そんな姿からはこの学習を通して土や虫，水，植物など身近な自然を愛おしむ気持ちがうまれ，知識と体感が結びつくことによって深い学びを得ることができた様子がうかがえる。また，かかわりの大切さにも気づく。

練馬区立富士見台小学校でも同様の学習が展開されている。緑のカーテンを通して植物の成長，水の循環，土と生き物のつながりを学ぶのである。その学習を通して高島第五小学校の子どもたちと同様に自然を愛護する心情が養われている。また，エネルギー環境教育の視点からも，緑のカーテンを進めている。環境を保全する行動として校内の環境をエコアップしていく学習の一つに緑のカーテンを位置付けているのである。地球温暖化防止に向けて一人ひとりが行動・活動したり，行動・活動を周囲に発信していく態度の育成を図っているのである。このことは持続可能な社会づくりに向けて一人ひとりに培っていきたい態度である。こうした行動・活動や発信を通して多くの人とかかわることができる。また，高島第五小学校の実践もそうであったように，人とのかかわりの大切さにも気づくようになるのである。

練馬区立富士見台小学校

今，緑のカーテンの取り組みは，全国に広がっている。冒頭に述べたように，「楽しく快適」という魅力によって，今後ますます各地に広まっていくであろう。そのために，私たち応援団は全国各地の取り組みをさらに紹介していきたい。一方，学校への広がりは今回お伝えしたような，子どもたちの内面の成長，心の豊かさの醸成が図られていくことを深く望む次第である。

習は，山を移すことである

―子ども達に学習の意味をきちんと伝え身につけさせよう―

淑徳大学名誉教授

白川静の言葉である。山を移すとは，気が遠くなるほど継続することであるという意味であろう。『論語』（学而第一の朱子註）に「習は，鳥が数々飛ぶが如し」という言葉がみえる。習の字の羽の部分は，鳥が連続して飛ぶ様子を表しており，鳥が連続して飛ぶように，何度も何度も繰り返すという意味である。山を移すと同じ意味であろう。

この言葉は，われわれに，学習の能率化を強調するあまり，こつこつと努力し続けることの大切さを忘れてはいないかと教えてくれる。

『心』（高田好胤・徳間書店）に台風と薬師寺の話がある。

昭和36年９月に大和を大風雨が襲った。その影響で近代建築がばたばたと倒れていった。好胤は，高く空にそびえ釘一本使っていない三重塔もだめであろう，自分の目でしっかりとみとどけなければならないと塔の前で三時間立ちつくしたという。三重塔は，暴風の中でいささかも揺るぎなく佇立していたというのである。

このことに関して，好胤は，つぎのように述べている。

「今日の世の中はあまりにも最小の努力で最大の効果をねらう者が多すぎます。努力するのはなるべく少なく，得るものはなるべく多く，これが能率主義という名のもとに行われているわけです。だが，最小の効果をあげるために最大の努力を惜しまない，その精神の大切さを，あの台風の時，三重塔から教えられました」

習は，山を移すことであるという白川静の言葉の重みが感じられる話である。

学校教育おいて，子ども達に，どんなことにも最大の努力を惜しまないとする古代人の心を伝えるとともに，そういう生き方を身につけさせる必要はないかと切実に思う。

然し，何でも継続すればよいわけではない。習は継続することが大切であるといっても，他者から強要された継続や目的意識のない継続は苦痛に終わるだけである。

白川静は学の喜びを「志を要す，恒あるを要す，識あるを要す」といっているが，学ぶ目的としての，志が大切である。

『常用字解』（白川静・平凡社・2003年12月）では，志とは，心がある方向をめざして行くことであると述べている。

このように考えると，子ども達に「学びは継続が大切である」ということを教えると同時に，「われわれは，何のために学ぶのか」という志について考えさせ，子ども達に自分の志を明確にさせることが重要であろう。

ところで「何のために学ぶか」という学びの向かう方向は何か。

立身出世という言葉がある。一人の人間として独立し，いい地位につくということである。『論語朱註』では，先覚者の行いや考え方を学んで近づくことによって，自分が本来もっている人間の心を自覚することが学であり，これが学の向かう方向としての志であるといっている。前者は目に見える志であり，後者は目に見えない志であろう。このことを突き詰めれば，自分の人間的成長を期す志と，人や社会のために働ける人間になるという志があろう。

このような遠大なことを子どもに認識させようとしても無理であろうから，教育者はこのことを意識した上で，今の子どもにとらえることのできる小さな目標とその学習の大切さを認識させ，それを身に付けようと意欲させることが大切であろう。

博学（はくがく）・審問（しんもん）・慎思（しんし）・明弁（めいべん）・篤行（とっこう），五者（ごしゃ），その一を廃しても学にあらざるなり

―五つの学びの「もと」から，教育のあり方を考え直してみよう―

新宮 弘識

程子（中国の宋時代の学者）の言葉であり，学ぶとは何かを的確に表現しているように思われる。

博学（先達が残してくれた文化を博く学ぶ）・審問（文化を学ぶ過程で，わからなかったり疑問に思ったりしたことを細かいところまで明らかにしようと求め続ける）・慎思（わからなかったり疑問に思ったりしたことを，慎重にあらゆる観点から考える）・明弁（わかったことを理論的に分類する）・篤行（わかったことを心を込めて行う）の五つは，その中の一つでも疎かにするようでは，学んだとはいえないという意味である。

私は，この言葉から，二つのことを学ぶことができるように思う。

その一つは，体験による学びの大切さである。

博学・審問・慎思・明弁の四つは，知的内面的な学習であり，座学であるといってもよい。篤行は，実践的外面的な学習であり，体験による学びであるといってもよい。

我が国の学問は，座学中心であったように思う。私が幼い頃は，机に向かっていれば勉強しているとみなされ，外に出ていれば，遊んでいると見なされたものである。生活の中で実践的に学ぶことは，学問ではなく勉強していることにはならないとされていたのである。

篤行は，知的内面的に学んだことを，行うことによって身につけるだけでなく，行うことによって新しいことを学ぶという教育的意味もあり，重要な学びの一つである。

このような体験による教育は，「子どもは，身体を通して学ぶ力が研ぎ澄まされている」という発達特性から考えても，大切である。

二つめは，この五つを身につけた人間こそ真の学ぶ者として魅力的人間であり，このことを教師も子どもも学びの基本としてしっかり認識し，子どもへ身に付けさせようとする教育が大切ではないかということである。

学びの五つの「基本」について子どもの姿から考えてみよう。

- 博学－文化を，よく見，よく聞き，よくわかろうとする子どもである。生まれながらもっている自分にないものを学びたいとする心を躍動させている子どもである。
- 審問－「どうしてそのようなきまりがあるの」「どうしてそのような定義があるの」「どうして勉強しなければならないの」等の問を発する子どもがいる。文化を学ぶ過程や生活の中で生まれたわからないことや疑問に思うことをはぐらかさずに詳かに問う力をもった子どもである。このような子どもは，学びの心を豊かにもっているといえよう。
- 慎思－問を解くために，慎重に大局的局部的観点から考えることが大切であるが，そのためには，友だちや親や教師に聞いたり，本で調べたりすることが大切である。このような学ぶ力をもっている子どもを育てたいものである。
- 明弁－わかったことを理論的に分類するといっても難しい。自分なりの引き出しを持っていて，わかったことをその引き出しにきちんと整理する力をもった子どもである。
- 篤行－道徳的に言えば，心をこめて行う子どもといえようが，応用する力をもっている子どもともいえよう。実行力のある子どもである。

われわれは，知識や技術という教育の結果から子どもを評価し勝ちであるが，以上述べた五つの学びの「基本」から，教育を考え直す必要があるのではないだろうか。

道徳教育と内容項目

青森県総合学校教育センター義務教育課指導主事　毛内 嘉威

1　はじめに

道徳教育とは，人間が本来もっているよりよく生きたいという願いや，よりよい生き方を求め実践する人間の育成を目指し，その基盤となる道徳性を養う活動である。道徳の内容とは，学校の教育活動全体を通じて行う道徳教育において，教師と子どもとが人間としてのよりよい生き方を求め，共に考え，共に語り合い，その実行に努めるための共通の課題である。

内容項目は，小学校の６年間に子どもが自覚を深め自分のものとして身に付け発展させていく必要がある道徳的価値を含む内容を，短い文章で平易に表現したものである。それらの内容項目は，児童自らが道徳性を発展させていくための窓口ともいうべきものである。

したがって，各内容項目を子どもたちの実態を基に把握し直し，指導上の課題を児童の側から具体的にとらえ，子ども自身が道徳的価値の自覚及び自己の生き方についての考えを深め発展させていくことができるよう，実態に見合った指導をしていくことが大切である。

つまり，内容項目とは，豊かな心をはぐくみ，人間としての生き方の自覚を促し，道徳性を育成することをねらいとする道徳教育の課題であり，道徳性を発展させていくための窓口というべきものである。

2　内容の構成

学習指導要領には，それぞれの発達の段階や道徳的課題を考慮し，児童が人間として生きていくうえで主体的に学ぶべき内容として，その基本的なものが示されている。

学校における道徳教育は，道徳の時間を要として，全教育活動において，児童一人ひとりの道徳性の育成を図るものである。したがって，内容項目は，子ども自らが成長を実感でき，これからの課題や目標を見付けられるような工夫のもとに，道徳の時間はもとより，各教科，外国語活動，総合的な学習の時間及び特別活動で行われる道徳教育において，それぞれの特質に応じて適切に指導されるべきものである。

内容項目は，学校の教育活動全体の中で，様々な場や機会をとらえ，多様な方法によって進められる学習を通して，子どもたち自らが調和的な道徳性をはぐくむことができるように，内容構成が考えられている。

(１)四つの視点

道徳の内容は，道徳教育の目標を達成するために指導すべき内容項目を四つの視点から，「第１・２学年」，「第３・４学年」，「第５・６学年」に分けて示している。

1　主として自分自身に関すること。
2　主として他の人とのかかわりに関すること。
3　主として自然や崇高なものとのかかわりに関すること。
4　主として集団や社会とのかかわりに関すること。

道徳の内容は，道徳性を四つの視点からとらえ，その視点から内容項目を分類整理し，内容の全体構成及び相互の関連性と発展性を明確にしている。人々は様々なかかわりの中で生存し，そのかかわりにおいて様々な側面から道徳性を発現させ，身

に付け，人格を形成する。

１の視点は，自己の在り方を自分自身とのかかわりにおいてとらえ，望ましい自己の形成を図ることに関するものである。２の視点は，自己を他の人とのかかわりの中でとらえ，望ましい人間関係の育成を図ることに関するものである。３の視点は，自己を自然や美しいもの，崇高なものとのかかわりにおいてとらえ，人間としての自覚を深めることに関するものである。４の視点は，自己を様々な社会集団や郷土，国家，国際社会とのかかわりの中でとらえ，国際社会に生きる日本人としての自覚に立ち，平和的で文化的な社会及び国家の成員として必要な道徳性の育成を図ることに関するものである。

この四つの視点は，相互に深い関連をもっている。自律的な人間であるためには，１の視点の内容が基盤となって，他の三つの視点の内容にかかわり，再び１の視点に戻ることが必要になる。また，２の視点の内容が基盤となって４の視点の内容に発展する。さらに，１及び２の視点から自己の在り方を深く自覚すると，３の視点がより重要になる。そして，３の視点から４の視点の内容をとらえることにより，その理解は一層深められる。

したがって，各学年段階においては，このような関連を考慮しながら，四つの視点に含まれるすべての内容項目について適切に指導しなければならないのである。

（２）児童の発達的特質に応じた内容構成の重点化

道徳の内容項目は，「第１・２学年」が16項目，「第３・４学年」が18項目，「第５・６学年」が22項目，「中学校」が24項目にまとめられている。

学年段階	項目数	視点１	視点２	視点３	視点４
第1・2学年	16	4	4	3	5
第3・4学年	18	5	4	3	6
第5・6学年	22	6	5	3	8
中学校	24	5	6	3	10

内容項目は，義務教育の９年間を視野に入れ，子どもの道徳的心情の発達，道徳的価値を認識できる能力の程度や社会認識の広がり，生活技術の習熟度及び発達の段階などを考慮し，最も指導の適時性のある内容項目を学年段階ごとに精選し，重点的に示したものである。したがって，各学年段階の指導においては，常に全体の構成や発展性を考慮して指導していくことが大切である。

内容項目の学年段階ごとの発展性には，次のような三つの形態がある。

ア　最初の段階から継続的，発展的に取り上げられるもの。
イ　学年段階が上がるにつれて新たに加えられるもの。
ウ　学年段階が上がるにつれて統合・分化されていくもの。

なお，指導する学年段階に示されてはいない内容について指導の必要があるときは，他の学年段階に示す内容を踏まえた指導や，その学年段階の他の関連の強い内容項目にかかわらせた指導などについて考えることが重要である。

また，以上の趣旨を踏まえた上で，特に必要な場合は，他の学年段階の内容項目を加えることはできるが，当該学年段階の内容項目の指導を全体にわたって十分行うよう配慮する必要がある。

3　内容項目と指導計画

校長の方針の下に，道徳教育推進教師を中心に，全教師が協力して道徳教育を展開するために，道徳教育の全体計画と道徳の時間の年間指導計画を作成する必要がある。また，年間にわたって実際的に活用できるようにするために，各教科等の道徳性の育成に関して，主な指導の「内容及び時期」を含めた計画（別葉）も作成する必要がある。

（１）内容項目はすべて取り上げること

２学年ずつまとめて示している道徳の内容項目について，その全てにわたって各学年ごとに計画に明確な形で位置づけ，指導する必要がある。

（２）重点化を考慮すべき内容の明確化

各学校においては，各学年を通じて自立心や自律性，自他の生命を尊重する心を育てることに配慮するとともに，児童の発達の段階や特性等を踏まえ，指導内容の重点化を図ること。特に低学年ではあいさつなどの基本的な生活習慣，社会生活上のきまりを身に付け，善悪を判断し，人間としてしてはならないことをしないこと，中学年では集団や社会のきまりを守り，身近な人々と協力し助け合う態度を身に付けること，高学年では法や

きまりの意義を理解すること，相手の立場を理解し，支え合う態度を身に付けること，集団における役割と責任を果たすこと，国家・社会の一員としての自覚をもつことなどに配慮し，児童や学校の実態に応じた指導を行うよう工夫すること。また，高学年においては，悩みや葛藤等の心の揺れ，人間関係の理解等の課題を積極的に取り上げ，自己の生き方についての考えを一層深められるよう指導を工夫すること。

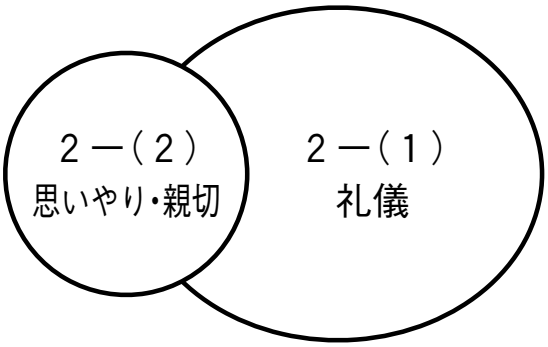
4　内容の具体的指導

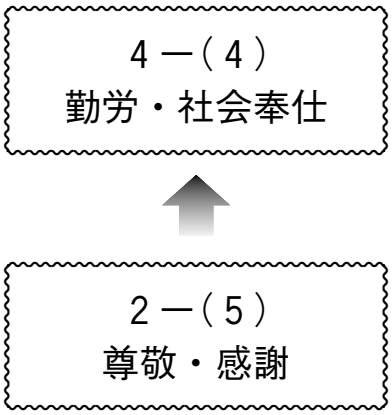
内容項目は，関連的，発展的にとらえ，計画作成や指導に際して重点的な扱いを工夫することにより，その効果を一層高めることができる。

(1)関連的，発展的な指導の工夫

①　関連性をもたせる

具体的な場で道徳的行為がなされる場合，道徳の内容に示されている一つの内容項目だけが単独に作用するということはほとんどない。そこでは，ある内容項目を中心として，同一視点内及び他の視点にある幾つかの内容項目が関連し合っている。例えば「第５・６学年」の場合であれば，２の(１)「礼儀正しく真心をもって接する」ためには，２の(２)「だれに対しても思いやりの心をもち，相手の立場に立つ」ことが必要であるし，また，４の(４)「社会に奉仕する喜びを知って公共のために役に立つことをする」ことは，２の(５)「日々の生活が人々の支え合いや助け合いで成り立っていることに感謝し，それにこたえる」ことと密接にかかわっている。





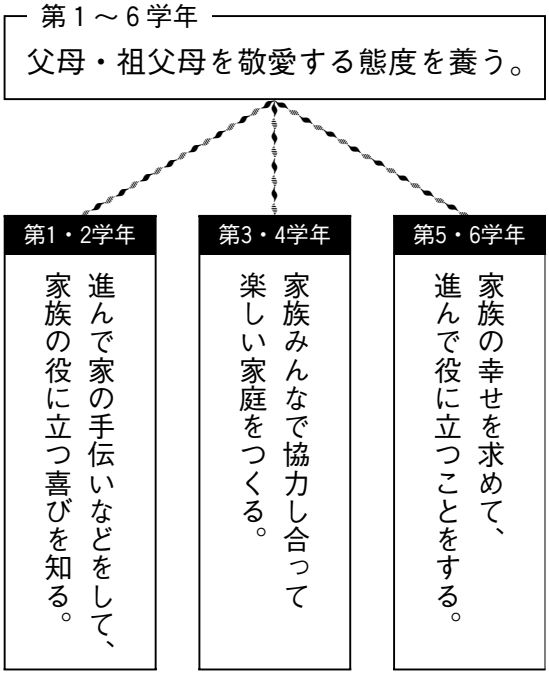
道徳の時間の指導に当たっては，他の内容項目との関連を十分に考慮しながら，指導の順序を工夫したり，内容の一部を関連付けたりして，実態に応じた適切な指導を行うことが大切である。そして，各学年段階を通して，全部の内容項目が調和的にかかわり合いながら，児童の道徳性が高まっていくように工夫する必要がある。

②　発展性を考慮する

「第１・２学年」と「第３・４学年」の内容項目は，すべてが「第５・６学年」の内容に発展・統合されるように構成されている。先に挙げた各内容項目の発展性についての三つの形態を参考にし，低学年から中学年，高学年への発展を考慮した指導を行う必要がある。

例えば，家族を愛する心を育てる内容については，第１学年から第６学年まで一貫して父母，祖父母を敬愛する態度を養い，「第１・２学年」では，「進んで家の手伝いなどをして，家族の役に立つ喜びを知る」こと，「第３・４学年」では，「家族みんなで協力し合って楽しい家庭をつくる」こと，「第５・６学年」では，「家族の幸せを求めて，進んで役に立つことをする」ことを強調している。このように，児童の発達に応じて，家族とのかかわりを徐々に深めて，家庭を担うものとして自覚ある行動ができるよう発展的に内容項目を示している。

６年間を見通した発展性を十分に配慮した計画の下に，各学年段階において重点化されている内容項目を適切に指導することが大切である。



（２）各学校における重点的指導の工夫

各学校においては，児童や学校の実態，学校の特色などを考慮し，重点的指導を工夫する必要がある。重点的指導とは，各学年段階で重点化されている内容項目の指導において，学校で更に重点的に指導したい内容項目をその中から選び，多様な指導を工夫することによって，内容項目全体の指導を一層効果的に行うことである。

この重点的指導については，学校の教育活動全体で重点化を図るものと，道徳の時間の指導の中で重点化を図るものなどが考えられるが，これらは十分な関連が図られていなくてはならない。

①　学校の教育活動全体における指導

重点的指導は，学校全体で取り組む必要がある。そのためには，道徳教育の全体計画の作成において，校長の方針の下に道徳教育推進教師を中心に全教師が協力して児童や学校の実態，児童や保護者の意見等を把握し，学校全体における道徳教育の重点目標を決めていくことが必要になる。また，それを具体的に指導していくための方針を各教育活動の特質を考慮して明確にしたり，各学年の重点目標を設定したりすることなども求められる。これらを通して，より計画的な重点的指導を推進することができるようになる。

②　道徳の時間における指導

道徳の時間においては，各学年段階の内容項目について２学年間を見通した重点的指導を工夫することが大切である。そのためには，道徳の時間の年間指導計画の作成において，当該の学年段階に示される内容項目全体の指導を考慮しながら，重点的に指導しようとする内容項目についての扱いを工夫しなければならない。例えば，その内容項目に関する指導について年間の授業時数を多く取り，各教科等での指導との関連を図りながら一定の期間をおいて繰り返し取り上げたり，一つの内容項目を何回かに分けて指導したり，幾つかの内容項目を関連付けて指導したりすることができる工夫などが考えられる。このような工夫を通して，より児童の実態に応じた適切な指導を行う必要がある。

（３）指導計画を作成する際の内容の重点化

各学年段階の内容項目の指導については，児童や学校の実態に応じて，２学年間を見通した重点的指導を工夫し，内容項目全体の効果的な指導が行えるよう配慮する必要がある。その場合には，特定の内容項目の指導時間数を増やし，一定の期間をおいて繰り返し取り上げる，何回かに分けて指導するなどの配列を工夫したり，内容項目によっては，ねらいや資料の質的な深まりを図ったり，指導の方法を多様にしたりするなどの工夫が考えられる。なお，それらを添付資料でまとめて示すことも考えられる。

５　おわりに

学年段階ごとに示されている内容項目は，そのすべてが道徳の時間を要として学校の教育活動全体を通じて行われる道徳教育における学習の基本となるものである。それぞれの内容項目の発展性や特質及び児童の発達の段階などを全体にわたって理解し，児童の学習が充実するようにしていく必要がある。

理想を胸に
―短歌や学級便りでかたよらない心を育てる―

八洲学園大学教授　渡邉 達生

はじめに

小学校では，日々，教育活動が目まぐるしく展開されている。各教科の授業はもとより，道徳の時間，外国語活動，総合的な学習の時間，特別活動，清掃の時間，給食の時間，朝の会や帰りの会の時間……。その，個々の教育活動が潤滑に進められるには，学級で，そして，家庭で，子どもの心が落ち着き，穏やかな日々を過ごせることが必要である。以下に，そのことに取り組んだ日々のことを紹介したい。

１．世俗の論理

今から10年ほど前，４年生を担任したときのことである。道徳の時間で，ある子どもが，「正しいことを言うと人に嫌われるよ。」と言った。「えっ。正しいことなのに，人に嫌われるの？」と聞き返すと，他の多くの子どもも，「そうだよ。」と言った。子どもの澄んだ目は，それが正直な思いであることを表している。齢10歳にして，心に，理屈では抗うことのできない，人の世のしがらみにたまる澱を抱え込んでいるのだと思った。それに対して，「そんなことはないよ。正しいことを堂々と言おう」と言うことはできた。しかし，言えなかった。そのような当然過ぎる指摘は，子どもたちの素直な思いに拮抗できない，観念的な思想でしかないと感じたからだ。

思えば，４年生になると，学校での学習内容や教育活動が格段に増える。家でも，スポーツクラブやお稽古事，学習塾と，やるべきことが多くなる。また，仲よしであるはずの友達との間にトラブルが発生したり，苦手なことが浮き彫りになったりして悩む。10歳は飛躍と混乱の時期である。

その日々に，子どもたちは，友達や親と暮らす生活の中で，生き方の指針をつかむ。１年生のときには「正しいことを言うと人に嫌われる」とは思わなかったであろう。しかし，体験の中で学んだ，子どもが生活の中で学んだものの見方は，自分で検証しながら積み上げてきた真理である。それは，世俗の論理とでもいえようか。しかし，実は，それは自己中心的な見方でもあるのである。それを淘汰する機会をつくってあげたいと思った。どうすればよいのだろう。道徳の時間では，がんばることは大切なこと，思いやりはいいこと，というように，よく生きることに価値を求める。しかし，その前に，心に，しがらみをつくりだすよどみを排除する，さわやかな流れをつくる必要があるのではないかと思った。

２．心の事情

思い悩んだとき，原点に立つことで，その解決の方向が見えてくることが多いという。そこで，知人の縁で関心をいだいていた，ある先人記念館を訪れた。そして，『大学』という書籍に出会った。『大学』は人の生き方を説いた中国の古典である。その本の中に，「心はかたよる」と，心の事情を書いているところがあった。わたしは，次のようにとらえた。

○人は，親しみの心をもつと，ひいきをしてしまう。
○人は，軽蔑や憎しみの心をもつと，差別をしてしまう。
○人は，おそれの心をもつと，ごきげんとりをしてしまう。
○人は，あわれみの心をもつと，甘くなってしまう。
○人は，おごりの心をもつと，優越感をもってしまう。

その通りである。人の心には，良い悪いにかかわらず，自らを落ち着かせる自然の成り行きがある。それを学んで，思うところがあった。人は人と親しくなりたいと思う。だから，学級に集う子どもたち，そして，親たちも，次第に同調者を得て，自分の心が落ち着く人間関係をつくりだして行く。しかし，親しさのよどみの中にいると，ある人をひいきをする心が生まれる。そのことで，他の人をないがしろにすることになる。ないがしろにされた人は，軽蔑されたと思う。軽蔑された人は，おそれを抱く。おそれを抱かれた人は，あわれみやおごりの心をもつようになる。いつのまにか，親しい人の間に，ひいき，差別，ごきげんとり，優越感が横行することになる。

子どもも親も人であるからにして，心に，その

部分をもっている。正しいことを言われた側に立てば，そこに他の人へのひいきのあるのを感じると，それは差別だと反感をもつことになる。また，人にごきげんとりをしているからそうするのだと考えたり，優越感を浴びせられたと感じたりもするだろう。だから，正しいことを言ったら嫌われる，となるのである。そして，自分は嫌われたくない，それこそが正しいことだという思いが心に宿ることになる。これらは，現代だから起きたことでもない。人の特性でもあったのである。

3．理想を抱く

しかし，このように，生活の中でつかんでいるものの見方を「世の中のならい」として受け入れさせてしまっては，よいことがよいことにはならない。子どもの正直さに，価値を求める指向性を具えさせたい。それを進めることが教育であろう。教育の目標は，教育基本法第一条にいう人格の完成を目指すところにあるのだから。自立に目覚める４年生の時期に，「かたよる心」にゆさぶりをかける取り組みをしたいと思った。

人が，心によどみをつくらないようにするにはどうしたらよいのだろう。心は，心の事情で，かたよる。親しい人との間であっても，親しさにかまけているとひいきや軽蔑が生まれ，よどみとなる。ましてや，悩み事や心配事にとらわれていると，うらみや繰言が生まれ，よどみはますます大きなものになろう。それを流し去るには，心に清浄な刺激を与え続けることであると思った。子どもの見方は，大人に比べて，まだまだ純粋である。周りの自然や人の営みに目をやれば，すがすがしさを感じ取れることもあるはずである。その，心が感じ取る清浄な事象を，言葉で心の中に収める。それが，周囲にも価値を放つものであれば，心には清浄な刺激が与えられることになるであろう。

4．短歌を毎日詠む

そのように考え，始めた取り組みが，子どもたちに，毎日，短歌を詠ませることだった。

日記代わりに，その日の事象を，短歌で一首，詠むのである。普通の日記では言葉を自由に使えるはずなのに，「～をして，たのしかったです。」調で，くくってしまうことも多い。自由であることがかえって精神の働きを休ませているのである。ところが，短歌となると，31音しか使えない。しかも，５音，７音の言葉に限定される。だから，心に浮かんだことを，どの言葉で整理しようかと，思いめぐらせることになる。しかも，心に残るよいことをつきつめようとする。そうすることで，その日に感じた不満やいらだちなどのネガティブな気持ちは消えよう。

子どもたち全員が小さな手帳サイズの短歌帳を持ち，毎日，一首ずつ，書き込んでいった。短歌帳は，週一回提出とした。月曜日に８人，火曜日に８人と……，毎日，８人ずつ提出で，40人の子どもの短歌も一週間で見ることができた。

次に紹介するのが，始めたころの短歌である

○さくらの木　花がなくなり　新芽出る
　みどりがいっぱい　元気が出ます

○あせかいて　あせをふきとる　ハンカチに
　あせがにじむよ　たいそうふくも

○行きのバス　ローソン下の　ツバメの巣
　子どもが首出し　母さん待ってる

○昼休み　遊んだ後の　冷水機　真っ赤な顔に
　すずしいそよ風

周りの自然や生活をふりかえって見つけ出した価値のあるできごとが，５音，７音の，歯切れのよい音で言い表されている。声を出して読むと，心地よさが広がっていった。

5．学級便りで短歌を知らせ合う

子どもたちの短歌を，そのまま，学級便りで紹介することにした。学級便りは，学級での教育の経緯を家庭に知らせる，大切な役割をもっている。しかし，日々の，だれが何をした，どういう失敗をした，こういうことに気をつけて欲しい，というような，子どもの生活をとりあげての学級便りであると，そのようにしなければならない，そうでなくてはならないという戒めが，とげとげしさをも生みだして行く。また，とりあげる子どもにかたよりが見られると，逆効果となってしまうこともある。しかし，全員の子どもの短歌を順番に紹介する学級便りにすると，親は斟酌なく，安心して読むことができる。そして，子どもの心づかいにふれて心が温かくなる。さらには，他の子どもたちの個性や，だれがどのような感じ方や考え方をするのかということにも関心が行くようになる。また，親が，わが子の心の成長を知る機会ともなる，と考えた。

実際，子どもたちが生活の中で見つけた価値のある事象を短歌に詠み，その短歌を学級便りで紹

＜節度＞　朝起きて　ふとんの中から　出るときは　もっと寝たいと　思うが起きる
＜努力＞　マラソンを　走った後に　湯気の出る　顔がまっかに　はく息白く
＜勇気＞　手をあげて　元気に発言　気持ちよく　心の中が　スカッとするよ
＜反省＞　帰り道　電車に乗って　本読んで　熱中しすぎて　降りるのぎりぎり
＜正直＞　工作で　作った私の　作品に　自分の気持ち　表れている
＜明朗＞　笑うとね　心も笑う　明るくね　笑った方が　いいことあるよ
＜個性尊重＞　水仙は　寒さに負けず　背を伸ばし　こごえもせずに　がんばっている
＜礼儀＞　たんじょう日　祝ってくれて　ありがとう　ぼくも二けた　みんなの仲間
＜思いやり＞　友達が　かぜをひいて　お休みに　明日は元気に　学校来てね
＜友情＞　マラソンは　きつくてちょっと　いやだけど　友と走ると　気持ちも走る
＜尊敬＞　ゆず一つ　庭木ばさみで　切り落とす　おばあちゃんの　苦労のてのひら
＜感謝＞　母の日に　私と姉とで　つくったよ　買い物行って　おいしいごはん
＜生命尊重＞　星空に　ひときわ輝く　赤い星　その星ぼくの　さそり座の星
＜自然愛＞　木々の中　サイクリングで　走ります　冷たい風で　秋を感じて
＜植物愛護＞　ふしぎだな　ほうれん草の　赤いとこ　そこだけ甘くて　土の味する
＜動物愛護＞　あじさいに　ついているのは　カタツムリ　雨が降る中　見とれてしまう
＜敬けん＞　朝起きて　まどの外には　朝やけの　オレンジ色が　きれいにそまる
＜公徳心＞　見たんだよ　電車の中で　よい心　席をゆずって　若い人立つ
＜勤労＞　役に立つ　新聞係　楽しいな　取材するのが　おもしろいんだ
＜家族愛＞　おじいちゃん　おあいしたこと　ないけれど　わたしをそばで　見守っている
＜愛校心＞　学校で　迎えてくれる　しも柱　先生いっしょに　さくさくならす
＜郷土愛＞　毎年です　川崎大師に　お参りを　とんとんあめの　音がはずむよ
＜愛国心＞　お茶つみの　八十八夜の　ニュース見て　おいしい新茶　飲みたくなった

介することで，子どものそれぞれの家庭と学級がつながったように感じた。

6．短歌を道徳の授業に生かす

学級便りで，子どもたちの短歌が蓄積されてくると，その短歌を道徳の時間に活用した。

道徳の時間は，読み物資料である「お話」を通して，そこに登場する人物の人生観を学ぶ。授業が半ばまで進んだとき，「このお話と同じようなことが友達の詠んだ短歌の中にあったかな」と投げかけると，「○○君の短歌にあったことと同じかな。」と，その時間にテーマとしている道徳的な価値が，身の回りの生活場面にもあることに気づくようになった。そして，４年生の終わりのころには，学習指導要領の示す道徳内容を網羅できるようになっていた。道徳内容に沿って一首ずつ紹介すると，上のようになる。

このように，道徳的な心を身近な言葉で言い表すことができると，道徳の時間で明らかにしようとする価値が，より身近なものとして理解することができた。

7．短歌を資料に，親に道徳の授業

子どもが長期の休みに入る前に開かれる保護者会では，それまでの学校での子どもの生活のようすや，これからの家での生活について，短歌をもとに，道徳内容を解説した。子どもの詠んだ短歌を資料にして行なう，親を対象にした道徳の授業である。

＜例１＞　学校での生活について，「努力」をテーマに，次の短歌を紹介した。

①帰り道　あまりの暑さに　下じきを
　うちわのかわりに　使ってあおぐ
②せきが出て　またせきが出て　また休む
　でも明日こそは　行けると思う
③マラソンを　走った後に　湯気の出る
　顔がまっかに　はく息白く
④なわとびで　百回こせた　あたたかく
　風はヒューヒュー　心はほんのり

＜話の骨子＞「どれもに，子どもたちの，ひたむきさを感じると思います。生きることはすばらしいです。①のことから，子どもには，工夫しながら生活をしようとする前向きな意気込みのあることがわかります。②のことから，学校に来ること，帰ることだけでも，大変な努力を要することがわかります。学校ではみんながいます。子どもたちはみんなといることがうれしいのです。ですから，③や④のようにマラソンやなわとびなどのつらいことも，みんながいることで，取り組むことができ，自分をきたえていけたのです。ややもすると，教科のテストの結果ばかりで，子どものがんばりを見がちになります。それでは，子どもの日々の努力を見届ける視点が欠けます。この短歌に見られるように，学校で子どもががんばっている姿を見る目をもちましょう。学校には家とは違ってつらいこともあります。でも，つらさは，自分を高める充実感へつながるのです。今学期，子どもたちは，学校でがんばりました。それを改めて知るために，家に帰ったら，今までの学級便りに

ある短歌を，もう一度，読み返してみましょう。」

＜例２＞　家での生活について，「節度」をテーマに，次の短歌を紹介した。

①朝起きて　ふとんの中から　出るときは
　もっと寝たいと　思うが起きる

②よごれてる　くつをみがいた　光ってる
　明日はくくつ　とってもきれい

③ふでばこを　気分てんかん　かえてみた
　うれしくなって　心もかわる

④久々に　アルバム開き　なつかしい
　思い出話に　花咲く夕食

＜話の骨子＞「子どもたちの詠んだ短歌を見てみましょう。①では，自分で踏ん張って起きだしています。②では，靴を磨いて学校に行くのを楽しみにしています。③では，筆箱を替えることでうれしさをつくりだしています。④では，思い出をもとに楽しい夕食の時間をつくりだしています。ここには，いずれも，生活の中に，大切な節（せつ）をつくりだそうとする心の動きがあります。そうすることで，生活の中に喜びが生まれます。ややもすると，子どもには，けじめをつける，時間を守る，規則正しい生活を，というように，上から目線で規範を押しつけがちになります。それでは，生活を楽しく切り盛りしようとする視点が欠けます。この短歌に見られるように，子どもが，よい節をつくりだしていこうとする場面を大切にしましょう。それが，家庭の中で，子どもが生きる力を身につけていくことになります。」

子どもの短歌を引用して道徳内容の説明をすることで，親が道徳教育や道徳内容の意味を理解しやすくなった。子どもの純粋な思いが，親に，道徳的な価値を再確認させてくれるのである。

８．学級便りの道徳編

日常生活にある道徳的な価値への関心が高まってきたところで，道徳の時間に子どもが思ったり考えたりしたことを，学級便りで家庭に知らせることにした。子どもが道徳の時間に道徳カードに書いたことを，「学級便り道徳編」として，そのまま学級便りに載せるのである。ただし，子どもの名前は伏せた。

＜事例１＞「勤労」をテーマにした授業では，「わたしのお仕事おすすめ情報」をカードに書かせたが，それを，そのまま，学級便りに載せた。

○お皿あらいはお皿についたよごれがさっととれて，すごく気持ちいい。

○ご飯をいためているとご飯がおどっているみたいだよ。

○お米とぎをすると，お米がザクッ，ザクッといって楽しいよ。（……以下，全員分続く）

＜事例２＞「正直」をテーマにした授業では，「正直」ということについて思ったことをカードに書かせたが，それを，そのまま，学級便りに載せた。

○正直とはすなおな気持ちになってちゃんと話すこと。

○正直とは，人の言ったことに反発したりしないこと。

○正直は自分でつくるもの。正直者はだれでもなれる。（……以下，全員分続く）

学級便りに子どもの名前は書かれていない。しかし，子どもが親にこの学級便りをわたすとき，「自分の書いたのはこれだよと言ってわたせるといいな。自分の書いたものの○印に色を塗って知らせてあげてもいいよ。」と，親に自分の思いを知ってもらう行動を勧めた。このことが，道徳の授業をもとにして親子のコミュニケーションを深めるもととなった。

終わりに

学級便りは，４年生を終わる時，62号になっていた。その間，学級便りにつづられた短歌は，419首に上った。後日，学級便りは文集に編集し，10年たった今でもわたしの手元にある。時おり開くと，当時の子どもたちの生き生きとした顔を思い出すことができて，心温まる時間となる。そのことから，当時，親もこの学級便りを読んでは，子どもの心の育ちや，学校での道徳教育への理解を深めていたのではないかと思う。今，20歳になっている子どもたちの手元にも，この文集はある。時おり開いては，昔の自分や，友だちとのことを，懐かしく思い出していることであろう。

今，学校教育は子どもに国際競争力をつけることを意識して充実の方向にある。しかし，心の落ち着くところがなければ，努力も上滑りしてしまう。先生方には，子どもにとって何が大切かをよく考え，悔いのない教師生活を送っていただきたい。子どもは大人になる。そして，子どものとき，学校で得たことは，人間性の礎となる。教育はそのためにある。

宿泊学習と道徳の時間とを関連させた授業
～子どもの成長を支える支援の在り方～

富山県中新川郡立山町立利田小学校教諭　高野 力郎

本物に触れる学びとなる宿泊学習

歴史を振り返ってみると，全てとは言い切れないが，美しいもの，善いもの，そして心に深く刻みこまれるものは，有形文化財，無形文化財を問わず，後世に残る事が多い。それらには，時間の垣根を越えて，先人の方々と今生きている私たちの琴線に，触れるものがあるからではないか。この琴線に触れるものを持ち合わせているものこそが，タイトルで言う「本物」である。

学校関係では，運動会の種目にも同様の様相が見てとれる。運動会種目の定番となっている「綱引き」,「リレー」がそうである。これらの種目は，都道府県を問わず，半世紀以上に渡り，行われている。それはなぜか。一言で言えば，参加者である子ども，参観なさる来賓，保護者，そして指導に当たっている教師の誰もがすばらしいと実感しているからである。

本論で提言させていただく，宿泊学習についてもそうではなかろうか。教師の立場からすると安全指導，物理的な準備，当日の指導など，苦労は多い。だが，そこで多くの子どもたちの成長やよさを教師や保護者は，垣間見ているはずである。そこには，宿泊学習ならではのよさがあるはずである。宿泊学習を単に学校行事の一つとしてとらえるのではなく，子どもにとって大きな学びのチャンスであるととらえる教師側の構えが大切ではなかろうか。本論では，宿泊学習と道徳の授業をリンクさせた実践を振り返り，子どもの成長を支える教師の支援を明らかにしていきたいと願っている。

実践から

1　宿泊学習をするにあたっての心構え

宿泊学習には，常に危険がつきまとう。特に登山を伴う宿泊学習では，登頂，下山に至るまでに，雪渓，雪ぴ，動く岩場，害虫などの危険があり，一般人も含め毎年多くの怪我人が出ている。そのため，案内人となるベテランの指導者が必要不可欠である。まさに，命がけの宿泊学習とも言える。だからこそ，教師も子どもも真剣に取り組まざるを得ない。程度は違うものの，どの宿泊学習においてもある面，命をかけるほどの覚悟が我々教師にも，子どもにも求められる。

そんなリスクを払ってまでもどうしてする必要があり，存在するのか？　それは，子どもたちが大きく成長するメリットが宿泊学習にはあるからである。そのためにも我々教師は，前もって宿泊学習に対する事前調査を行い，子どものどのような成長を期待できるのかを予測しておかねばならない。そうすることなしでは，子どもの成長をとらえることは当然のことながら難しい。そのために教師は，宿泊学習をするにあたり，事前に子どもと同じ日程を行ってみることが大切である。

2　例示する宿泊学習の概要

私が暮らす富山県では，半世紀前から高学年の子どもたちが，三千メートル級の山々が連なる立山連峰の一角を成す「雄山」を登頂する「立山登山宿泊学習」がある。私も，小学校時代は登頂した覚えがあり，これまで20回以上は登った経験がある。山頂にたどり着く喜びは格別であると共に，大自然の偉大さ，神々しさを感受できるなど学ぶべき点が多い。

3　道徳の授業との関連

～ねらいと内容項目との意味づけ～

一言で宿泊学習と言っても，場所や季節，子どもたちの発達段階や実態によってねらいは大きく変わる。ここでは，先述した高学年「立山登山宿泊学習」の実践例について述べる。「立山登山宿泊学習」のもつ可能性と関連する道徳の内容項目は，一般的に以下のものが考えられる。

① 文明を寄せつけない人智を超えた自然の厳かさ，雄大さ，美しさに触れることができる。このことは，本来人間がもつ美しいものを美しいと感じる心を呼び覚ますことになる。そして，自然に対する愛着や尊敬の念を育む基盤となるであろう。
［３－（２）自然愛，３－（３）敬虔］

② 困難な山を登り切ることで，やり遂げることの大切さを実感したり，自尊感情が高まったりする。また，仲間と困難を乗り越える体験を通して，仲間の大切さ，協力の在り方を確かにすることができる。
［１－（２）希望，努力，２－（３）友情］

上記のものは，あくまで一般的に考えられるものであり，実践に当たっては，子どもの実態に即した関連や具体的なねらい，授業を構想することが大切である。

次項では，主に内容項目３－（２）に焦点を絞った実践を例示する。

4　自然とのかかわりから，自分のよさに目覚めたＡ児

（１）子どもの実態と授業構想

宿泊日程（全３日間）
・登山（縦走）10時間
・宿泊場所周辺の自然探索　４時間

道徳の時間の授業構想
総合の時間と関連を図る授業構想
総合の時間「立山研究」全20時間
道徳の時間　２時間
「地球があぶない」（光文書院）

この実践に登場する子どもたちは，住宅街や商店街に住み，普段から自然に触れ合う機会が少ない。無論，山にはほとんど行ったことがない。「立山登山宿泊学習」に対しては，学校の伝統的な行事としての見方が強く，第６学年になると必ず行かなくてはならないという義務感が強かった。そこで，大自然の大きさ，美しさを大いに感受できる宿泊学習の日程と学習過程に配慮した。

（２）Ａ児の歩みと授業

・概要

３年生になって転入してきたＡ児は，それまで都会にいたため，全くといってよい程，自然に対する心の結び付きが弱いように思われた。食べている魚や肉はもとから固有に存在するものであるととらえており，動植物に対して，触ることすら抵抗が強かった。そのＡ児が宿泊学習をきっかけに，自分の可能性を広げていくこととなった。

・宿泊学習前のＡ児の姿

宿泊学習の前に，総合の時間「立山研究」15時間を設けた。Ａ児は，総合の時間で立山登山の装備を調べる事から始め，ルート確認などをインターネットで調べていた。全く動植物には関心のないＡ児のようであった。

そのようなＡ児が，ある日，仲間の調べ学習のまとめ新聞をじっと見つめる瞬間があった。それは，立山に咲く花の写真であった。これといった派手さはなく，素朴に細やかな白い花びらをつけるその花は，「チングルマ」であった。Ａ児はその日を境に，高山植物のことを調べはじめた。何十種類もの立山に咲く花や動物までをもファイリングし，時間があると眺めていた。以下は，宿泊学習に行く前のＡ児の作文である。

「早く本物を見てみたい」

ぼくは，来週の宿泊学習が楽しみです。だって，今まで調べてきた動物や植物の本物を見ることができるからです。

立山研究をするまでは，宿泊学習は，あまり楽しくない，疲れるだけだと思っていたけど，今はとてもわくわくしています。

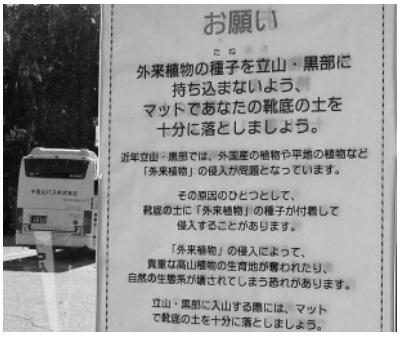
Ａ児の作文からは，宿泊学習に対するめあてを明らかにし，意欲を以前よりは，やや高めたよう

であった。だが教師には，写真と本物とを照合することが，果たしてA児のわくわく感に，どのようにつながっているのか理解できなかった。

・宿泊学習中のA児

いよいよA児が楽しみにしていた宿泊学習が始まった。だが，１日目は雨のため，登山は延期となった。２日目は，天候が好転し，晴れやかな天候となった。A児は，宿泊学習までにつくってきたファイルを手に持ち，目の前の草花が何であるのかを確認しながら，散策する。そのため，歩くことに問題が生じ，指導される一幕もあった。夢中になって立山の自然を満喫するA児であった。

だがバスでの帰り道，A児が顔を曇らせる出来事があった。休憩をとるために寄ったバスターミナルで，A児は，入口に貼ってあった一枚のポスターに目を奪われた。それは，ズックの裏についている泥ばかりでなく，種を落とすことに協力を呼びかけるものであった。最初とまどっていたA児であったが，そのポスターが何を意味するのかをターミナルで働いている方に話を聞いた。そこで，A児は思わず「えっ！」と叫んだ。また，帰りの道に雪もないのに融雪装置から水が流されていることに気づいたA児は，帰ってからそのなぞを調べた。すると，その水はタイヤについている種を落とすものであることを後日知ったのであった。



夏休み中に行われた宿泊学習であったため，その後のA児の動きは詳細にはわからなかった。だが，２学期A児は，１学期とは違う動きを見せ出した。絶滅に向かう立山の高山植物のことをA児は必死になって調べた。ターミナルのポスターや融雪装置の水は，外来種のタンポポなどを近づけないためのものであることを知り，立山の自然の生態系に何が起こっているのかをA児は気になったのである。すると，外来種の植物の進行だけでなく，温暖化による原因と言われる餓鬼田（立山の湿原帯）の消滅，環境の変化による動物の絶滅の危機をも知ることになった。これらの事実は，学級新聞を通して，学級の仲間にも広がっていくこととなった。

・道徳の授業におけるA児

このようなA児の状況をとらえ，資料文「地球があぶない」を基に授業を行った。以下は，授業の様子である。

T　資料を読んで，今どのようなことを思っていますか。（挙手をするA児を指名）

A児　温暖化の問題については，５年生の時から知っていたけど，他人ごとみたいに思っていた。だけど，立山研究や実際に行って，リアルに思えてきた。

・B児　どんなことが？

A児　登山している時はあまり気づけなかった。家に帰る途中に多くのことに気がついた。見てきた餓鬼田が昔よりもすごく少なくなっていることや外来種の植物が増えて，今まであった立山の高山植物が減ってきている。あんなにきれいな自然が変わってしまうことは残念に思う。なんかさみしい。

・B児　A君がそんなこと話すなんてすごく意外なのだけれど…。

・C児　どうして意外なの？

B児　だって，A君は４年生の時，ミミズさえもさわれず，騒いでいたじゃない。そんなA君がどうしてここまで真剣に自然のことを考えるようになったのか不思議。確かに私も，自然は大切だと思う。だって自然が存在しないと私たち人間は生きられない。でも，A君のようにさみしいと思えないなあ。A君って実は温かい人なのだなあと思った。

D児　私は，A君の気持ちが少しわかる気がする。立山登山に行ってとても自然の美しさを感じた。あんなに自然がきれいだとは思わなかった。初めてだった。実は，宿泊学習に行くまで，少し悩んでいたことがあった。だけど，何か大きな立山に登って，すごい景色を見ていたら消え去ったというか，とてもちっぽけなことで悩んでいた自分だなあと思った。素敵な自然がやはり破壊されていくのは，私もつらいし，嫌だなあ。

授業では，自然が崩壊していく事実を目の当たりにし，「さみしい」と話したA児の心境を探りながら，A児や自然に対する自分の思いをみつめていったのであった。以下は，授業後のA児の作文である。

> 友だちが，「自然が大切だ」と言っていたけど，ぼくは，大切というよりも好きだし，何とかしてあげたいと思っている。高山植物や山にいる動物のことを調べた。そしたら，絶滅に近づいている動植物がたくさんあって，その原因は，人間だということがわかってきた。なんとか食い止めるために，地元の人が活動をしている。ぼくは，立山に行って何かできるわけではない。せめて身近な町の自然を守る手助けができたらいいなあと思っています。

A児はその後，学校の委員会活動を通して，ごみ０活動に取り組んだり，積極的に空き缶回収を行ったりした。また，近くの川にごみが多いと知るや，地元の方の家を訪問し，ポスターを貼っていただくなど地道な環境美化に努めた。

A児は，宿泊学習を契機に，植物を中心とした自然に関心を高め，心をつなぎはじめたと思える。また，道徳の時間によって環境破壊に対する問題を，自分のこととして受け止めることができたように思われる。

（３）子どもの成長を支える教師の支援とは？

振り返ってみるとA児を成長させた要因には，以下のものが考えられる。

①　本物にふれる体験活動と問題解決的な学習過程の設定と関連

本物（チングルマを始めとする立山の自然）のよさや衝撃的な出来事（環境破壊）に出会うことで，A児は潜在的にもっていた「自然を慈しむ心」が開花されていったと考えられる。実物にふれる機会を設けることも無論大切であるが，A児が自分の問題をみつけ，歩み出すことのできる学習過程が保証されていないと，そのような可能性は低かったように思われる。子ども自身が気にかかる問題をもち，解決しようとする意欲を引き出すことが肝要であると思われる。

②　子どものよさを生かす道徳の時間の構想

本主題の道徳の授業を，宿泊学習や子どもの実態に合わせて，タイムリーに行う。このことで，子どもたちは自分の体験をベースに仲間の話を聴いたり，主題について自分の心をみつめたりすることがやりやすかったのではなかろうか。

また，A児を第一発言者として取り上げ，A児の学びを中心にした授業構想を考えることで，A児は，自分の心情を赤裸々に語る機会が訪れた。そのA児に対する仲間の承認，批判によって，A児は自らのよさをメタ認知できたように思われる。

A児に限らず，すべての教育課程には子どもたちが大きく飛躍する無限の可能性がある。そのチャンスをどう生かしていくのかは，我々教師のとらえ方次第である。そのためにも我々は日々，子どもたちの実態把握に努め，願う子ども像を探ると共に，子どもの可能性を探っていく修練が大切である。そのことに気づかせてくれた子どもたちに感謝したい。

（ワンポイント）

> **宿泊学習に対する教師の構え**
> こなす　⇒　生かす
> 前向きに取り組む教師の姿勢が大切
> **宿泊学習（体験）と道徳の時間との関連**
> 体験　⇔　道徳の時間
> 相乗効果をねらった構想を練る
> 子どもを育てるには両輪が大切

参考文献
『子どもの可能性に立つ道徳教育』（国土社）

新宮弘識

体験を生かして
～高学年としての自覚を高める～

習志野市立谷津南小学校教諭　松田 憲子

昨年に続き，６年担任。行事と道徳とを関連づけて，最高学年としての自覚を育てる実践を紹介する。初回は，縦割り活動での「１年生を迎える会」。

１年生を迎える会は

たくさんの準備をして臨んだ当日。ドッジボール，鬼ごっこなどを実施。しかし１年生が迷子になるなど，ハプニングが続出。終わったあと１～５年生の「楽しかった」という感想にほっとした表情の６年生がいた。「１年生が喜んでくれて良かった」「ありがとうといわれて，がんばって良かったなと思った」などと振り返っていた。

道徳「６年生って大変」

翌日，自作資料（詩）を用いて道徳授業をした。資料「６年生になるって大変」

６年生になるって大変
だって６年生っていうだけでしかられる
すぐ「６年生でしょ」って言われる
いっつもがんばらなくちゃいけないのはプレッシャー
（中略）
委員会やクラブでは委員長や部長もしなくちゃ
みんなの前で話すのはほんとは苦手なんだよ
一生懸命説明してるつもりでも，なかなかわかってもらえない縦割り活動での遊び
「どうするの？」すぐに質問やってくる
でも，遊びが終わって帰るとき，１年生が「ありがとう」って言ってくれた
他の学年も「楽しかったよ」って言ってくれた
そういえばこの前，委員会で一生懸命仕事をしてたら，５年生も一生懸命やり始めた
ちょっと……うれしかった
６年生になるって大変
でも，なんか……６年生もわるくないかな

子どもたちは等身大の作者の気持ちに共感した。「僕もみんなの前で話すのは苦手だから，この前の縦割り活動では初めて会う人たちの前で話すのは緊張した」「縦割り遊び，私たちも一生懸命考えたつもりだったけど，いろいろ起きて大変だなあって思った」と本音が飛び出した。

「作者は，どうして『なんか……６年生もわるくないかな』と思ったのでしょう？」と問うと「１年生にお礼を言われたから」「僕たちもだったけれど，みんなに喜んでもらえたから」自然に自分たちと重ねて話していた。

そこで「１年生を迎える会」の直後に撮った１年生のビデオを流した。「みんなと遊べて，とっても楽しかったです」「お兄さんやお姉さんがとっても優しくて良かったです。転んだとき，助けてくれました」短いコメントを食い入るように見つめ，そして表情がほころんでいった。

その後，昨年の６年生が詠んだ川柳を渡した。

６年になって……（抜粋）
委員会　ドキドキしながら　しゃべったよ
縦割りで　６年責任　重大だ
６年でしょ　毎日言われて　プレッシャー
最後の縦割り活動を終えて……（抜粋）
みんなにね　感動いっぱい　ありがとう
これからも　縦割りガンバレ　５年生
いつもより　大人に見えるな　５年生
５年生　来年中心　がんばって

後半の川柳は，５年生のときのこの子たちが中心となって行った活動のあとに詠んだ作品である。

１年生のビデオと昨年の６年生の川柳を読んで話し合った。「１年生に『ありがとう』という思いがたくさんあると知ってとてもうれしかった」「去年の６年生がこんなにも僕たちを思っているとは思わなかった」「今年１年間がんばるぞとやる気が出てきた」

それまでは「やらなければ」という思いが強かったのが，この授業で１年生や他学年の感謝の気持ちや前６年生の思いを知り，やりがいと６年生としての意欲を高めることができた。

「人間関係づくりの演習と道徳①」

～「いな運送」で認め合う温かい人間関係づくりを～

市原市教育センター所長　土田 雄一

道徳の授業だけでなく，授業づくり，学級づくりの基盤には「人間関係と信頼関係づくり」が必要であることはいうまでもない。では，その基盤をどのようにして築いたらよいのだろう。ここでは，人間関係づくりに役立つ演習を紹介し，演習と道徳授業との関連について述べる。

「しりとり」は最強の関係づくりの演習

初対面やよく知らない人同士の関係づくりに，「しりとり」をよく活用する。これが意外に効果的。それはなぜか。まずはルールが簡単。老若男女問わずだれでも理解できる。「前の人の言葉を受け取る」ことでつながりが生まれ，「声をだす」ことで心が開かれやすくなる。メンバーの回答に「反応がある」と受け入れられる感覚が生まれる。

聴き方「いな運送」

ウォーミングアップが終わったら，「ルールを追加」する。それは聴き方の「いな運送」だ。

い＝いいねぇ
な＝なるほど
運＝うんうん
送＝そうそう・そうだね

今度は，メンバーが言った言葉に他のメンバーが「いな運送」で反応することを約束とするのである。「ゲームだよ」と言えば楽しくできる。

たとえば，お題を「教室にあるもの」とする。「つくえ」「いいねぇ」。「チョーク」「なるほど～」。「時間割」「うんうん」。「そうじ用具箱」「そうそう」。などである。

これは，やってみると意外に楽しい。お互いに楽しい。笑顔が生まれる。ルールとはいえ，認めるリアクションがあると「受け入れられている感覚」になり，グループへの「所属感」が生まれる。

お題を「冷たいもの」や「やわらかいもの」のほか，「夏に使うもの」などに変えたり，ゲームを変えたりすると楽しく関係づくりができる。

道徳授業と「いな運送」

道徳の時間は，「自分の考えたことや思いをそれぞれが発言できる時間」である。しかし，学年が進むにつれ，自分の考えを話すことに抵抗感が生じる。周囲の目を気にするようになる。それは，発達段階から考えるとしかたのないことかもしれない。しかし，だからこそ，「それぞれの意見はちゃんと受け止めていますよ」というメッセージをお互いに発信することが，道徳の時間を充実させるために必要なのである。

「いいねぇ」「なるほど」「うんうん」「そうだね」という反応は，発言者に安心感を与える。受容的・共感的聴き方である。

「礼儀」の授業と関連させる

内容項目２－（１）礼儀の授業と関連して扱うのもよい。たとえば，５年「日本の心とかたち―真・行・草―」という資料がある。おじぎを例に形と心が一体となる日本の礼儀の美しさを扱った資料である。おじぎも形だけだと相手への謝罪・誠意は伝わらない。心が伴ってこそ，気持ちが伝わる礼儀となる。「いな運送」も相手を見て，「相手の思いを受け取ろう」とする気持ちがあれば，より深く相手の理解ができる。相手も心地よく話すことができ，「心と形の一体化」が実感しやすくなる。

「いな運送」が口癖のように自然にでるような学級・道徳の時間にしたいものである。

授業参観におすすめの道徳授業

～高学年だからこそ『家族愛』～

岐阜大学教育学部附属小学校　竹井 秀文

1　家族愛と資料「新しいくつ」

授業参観におすすめといわれると，すぐに家族愛とこたえる。それほどまでに定番である。授業参観には，多くの家族が参観する。だから，家族愛を考えさせるのは理にかなっている。その反面，高学年での家族愛は，子どもたちが恥ずかしがるのでさけたいという声を聞くこともある。確かに，低学年や中学年のような盛り上がりはない。道徳授業での挙手や発言も少ない。授業参観を見栄えで考えるのであれば，さけなければならない価値項目かもしれない。しかし，授業参観でしかできない道徳授業をやろうと思えば，見栄えなどどうでもよいのである。つまり，子どもたち・保護者・教師の３者がじっくり考える空間をつくることが授業参観でおこなう道徳授業の醍醐味だろう。極論をいえば，どんな価値項目でも保護者を巻き込む道徳授業をつくりだせばよいのである。

さて，話をもどすことにする。高学年になると宿泊行事など，親元から離れて集団生活をする機会に恵まれる。こんなチャンスはない。今まで当たり前のように育てられてきたという感覚から，家族あっての自分を見つめなおすよい時期なのである。高学年だからこそ，それができる。今回は，家族あっての自分を見つめなおし，これからの生き方にどうつなげるのかを考えさせたいと思い「新しいくつ」（東京書籍・旧版）という資料を用い，授業参観を行った。資料「新しいくつ」のあらすじは，以下の通りである。

> ５年半もの間，足の病気を患う雅之。３キログラムもあるほそう具をつけて歩く雅之を，全力で支える母親。そして，ある日雅之の足は，完治する。両足で歩けるようになった雅之に対して，母親は「新しいくつ」を買いにいこうと喜びを爆発させる。その母親の姿から見える雅之への深い愛情。病気が治った雅之は，今まで支えてくれた家族の手助けになるようにがんばろうと決意をする。

資料名である「新しいくつ」とは何かを考えることで，家族愛について考えることができる。それほど，力のある資料といえる。今回の授業実践では，この「新しいくつ」を通して，保護者の「慈」の心について考えを深め，自分がもっている「孝」の心に気が付き，これからの生き方につなげられるようにした。つまり，授業参観に見えた保護者の慈しみを感じ取り，親あっての自分に気付ける時間となるようにした。さらに，本校５年生の宿泊行事である「飛騨発見の旅（２泊３日）」と関連させた。飛騨発見の旅では，親からの手紙をもらうことになっている。その時，子どもたちは，保護者から離れているだけに深い「孝」の心をもってもらいたい。そのために，親の「慈」の心について考え，敬愛の念をどの子もが深められるようにしたい。

2　指導案について

主題名「家族の絆」として，ねらい，展開は以下のようにした。

◆主題名／家族の絆

新しいくつ	４－（５）家族愛

（１）主題のねらい

◎家族の慈しむ心に感謝し，家族の生き方を尊敬して，家族のために役立とうとする。

＊自分の成長を喜び，慈しみ育ててくれた家族の思いに気付く。

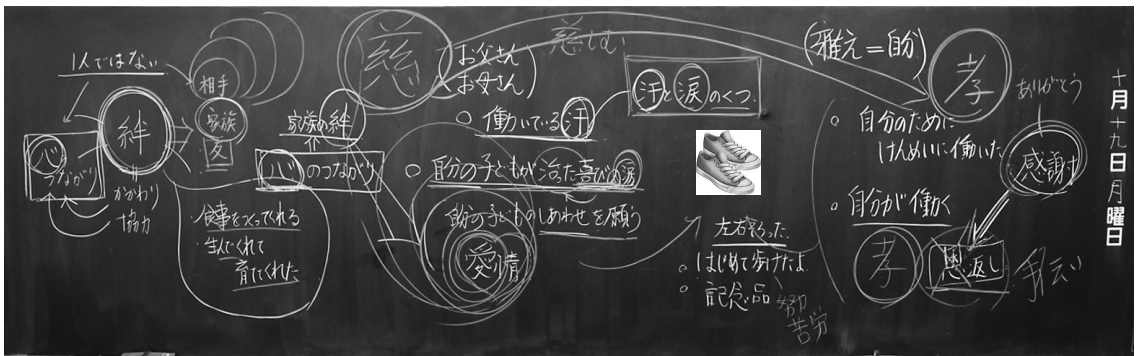
＊家族の人としての生き方に触れ，そのたくましさややさしさを知る。

＊家族のために，自分からできることはないか役に立とうとする意欲をもつ。

（２）展開（例）

主な学習活動	指導の方法	子どもの心と力の高まり
①「絆」とは何か考える。	○「絆」は，自分とのつながりが深い人であることを伝える。今回は，家族のつながりについてスポットを当てる。	○学級の友達との絆，家族の絆 ○絆って，なんだろうな。 ○絆って，人と人とのつながり。 ○似ているけど，違うな。 ○家族の絆ってなんだろう。
②資料『新しいくつ』を読んで「新しいくつ」とは，何かを考える。 ・くつの中にある「思い＝家族の絆」を考える。	○家族の絆とは，何だろうという問いをもたせて資料に入る。 ○「新しいくつは，□だ」の□の中を自由に考え，くつが家族の絆の象徴であることを自分なりの言葉で整理させる。	○新しいくつは，母の愛だ。 ○新しいくつは，家族の思いだ。 ○新しいくつは，家族の絆だ。 ○新しいくつは，家族の新しいスタートだ。 ○本当にうれしかったんだな。 ○雅之のことを大切に大切に思っているんだな。
・お母さんの涙の意味を考える。 ・足が治ったわけを話し合う。 ・雅之が「がんばろう」という思うエネルギーが，どこからくるのか話し合う。	○母の姿から，病気が治った喜びをとらえ，母の自分に対する慈しむ思いをとらえさせたい。 ○強くたくましい母の生き方や自分への慈しむ思いが病気を完治させたことを交流させる。 ○家族のために役に立とうと自らが思うわけが，感謝の心や尊敬の念になることを共感させる。	○病気のことでつらかったんだな。 ○母のたくましさが伝わったんだな。力強くてすごいな。 ○雅之を治したい強い気持ちがすごい。 ○自分を思ってくれた母への思い。 ○自分のために，懸命に働く姿に感動している。 ○親への感謝と尊敬から。
④自分にも「新しいくつ」みたいなものがないかを考える。	○自分にも，家族の絆を象徴するものがあることに気付かせ，家族の役に立とうとする思いを奮起させる。	○自分の家には，自分が赤ちゃんのころの写真がある。 ○桐の箱に入っている「臍の緒」がある。
【飛騨において】 ⑤それを見ながら，家族への思いを手紙に書く	○家族の役に立つぞという自分の決意を書かせる。	○ようし，自分も家族のためにできることをやっていくぞ!! まずは，手伝いからだ。

（３）板書



3　指導の実際

T：今度行く「飛騨発見の旅」のスローガンは知っていますか。

C：「深めよう絆」

（「絆」という字は，辞書で調べてみるとわかるが，あまりよい意味ではない。ここでは，子どもたちが，仲間の絆を深めようという願いを込めて，宿泊行事のスローガンをつくった。今回は，飛騨発見の旅との関連や家族の絆について考えたいと思い導入に位置付けた。）

T：どんな絆がありますか。絆とはなんでしょうか。

C：仲間との絆

C：家族との絆

C：絆って，かかわりだと思う。

C：絆って，協力だと思う。

C：一人ではないということ。

C：自分がいて，相手がいること。

C：心と心のつながりだと思う。

C：仲間の中にも，家族の中にもある。

T：家族の絆について，もっとくわしく話をして。

C：家族との心のつながり

C：例えば，ご飯をつくってくれたり，お世話してくれたり。

C：生んで育ててもらっている。（笑い）

C：それだけかな。家族の絆ってなんだろう。

C：先生，資料ないの。

T：今日は，家族の絆について考えながら読んでね。（資料「新しいくつ」を配布）

T：この資料にでてくる「新しいくつ」とはなんだろうね。

C：左右そろった新しいくつ。（笑い）

C：はじめて歩けたという記念のくつ。

C：家族の努力や苦労。

C：家族にとって，かけがえないのくつ

C：汗と涙のくつ

T：汗と涙……。どういうこと。

C：汗は，自分のために，一生懸命，働いてくれる汗。

C：涙は，病気の苦しさを乗り越えた子どもの健康について，元気になった喜びの涙。

C：どちらも，親の思いを強く表現した「新しいくつ」。

C：どちらも，自分の子どものしあわせを願う汗や涙。

C：その汗や涙は，愛でしょう。

C：ああ。家族愛だ。

（たくさんの子どもたちが口ずさむ）

T：なるほど。でも，どうして雅之くんは，自分も働きたいと思うのだろう。

C：親へのありがとうという感謝でしょう。

C：自分のために一生懸命に働いた親に恩返ししたいという思いかな。

C：それは，親の思いにこたえようとする思いだと思います。

C：ぼくも親に何かしてあげよう。親を喜ばせよう。親に迷惑をかけてはいけないと思う。

T：そういう思いをなんというかわかるかな。

C：親孝行っていうよ。

（あ～と多くの子どもたちが賛同する。）

T：みんなも同じような家族を思う心を親孝行の「孝」の心というよ。

C：じゃあ，先生。親が子を思う心は。

T：みんなが言った愛でいいよ。でも，あえて付け加えるなら，愛のもっとも深いことをいう「慈しむ」かな。親が子どもを思う心は，「慈」の心だね。

C：あ～，この「慈」と「孝」がつながって家族というのか。

C：家族の絆って，慈と孝のつながりのこと。

C：その絆は，愛情がふくらんでいくんだ。

C：家族愛ってすごい。

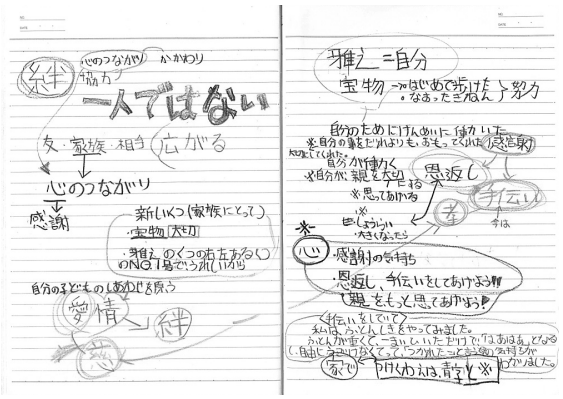
C：先生，せっかく家の人いるから，意見をききたい。

T：じゃあ，おうちの方へインタビューしてみようか。「家族の絆」「家族愛」についてどう思いますか。

H：とても難しいテーマですね。親としては，当たり前だと思っていることです。でも，こうやって考えていくと親と子とのつながりは，深いのですね。

H：みなさんが。親孝行をしようという気持ちは，よく伝わっていますよ。だから，私も子どもが感じることや考えることを大切にしたいと思っています。

この後，家族の絆について，自分の思いを道徳ノートに書いて，授業を終了した。



4　授業後の宿泊行事

この授業の３日後，２泊３日の宿泊行事に出発した。

初日の夜にキャンドルサービスがあり，家族から預かった手紙を，一人ひとりに手渡しをした。幻想的な雰囲気の中，じっくりと手紙を読む子どもたち。親の「慈しみ」の思いがこめられた手紙を読みながら涙を流す子どももいた。高学年の純粋な心に，担任も心を打たれた。

その夜のミーティングの時間に，親へ手紙を書く時間をとり，自分の「孝」の思いを深めた。

【手紙の内容】

> お父さん・お母さんへ
>
> 手紙ありがとうございます。この前，自分が生まれたときに足首につけるバンドを見せてもらいました。小さい自分が今のように大きく元気に過ごせること感謝しています。（続く）

5　保護者の感想

保護者から次のような感想をいただいた。

> 授業参観ありがとうございました。一つひとつの答えをよく考え，自分の意見として発表する子どもたちの成長を見せていただきました。
>
> お母さんの買ったくつが，なによりも価値があることを子どもたちは感じ取り『汗と涙のくつ』というキーワードを子どもたち自身が導き出せる様，丁寧に進められあったかい授業でした。
>
> 日々の生活の中で，絶対的な家族の愛情を感じ，人の気持ちの分かる優しい豊かな心の人に育ってほしいと改めて願う次第です。
>
> 授業中での「家族愛だ」と口々に叫ぶ子どもたちの声は，胸に刺さりました。親として子どもにとって大切な事を意識して生活しようと思いました。『家族』について考えるよい一日となりました。ありがとうございました。

> 今日は，親として，又，一人の人間として，勉強になりました。普段は，忙しさに，子どもに対して，家族に対してゆったりと接することがなかなかできていませんでした。
>
> 先日，主人から「仕事のやり直しはできても，子どもへのやり直しはできない」といわれました。夫婦で，家族で子どもは育てていくものですが，一番そばにいる母親がやはり大切です。
>
> 子どもからの手紙は，私の専用アルバムに貼ります。ありがとうございました。

> ～中略～
>
> 授業の中で，A子は考えがうまくまとめられず，自信がなかったのでしょう。手も挙げているのかどうなのか？ほとんど，先生にあてられないように挙手をしていましたが，形だけに目を向けるのではなく，私も，感じているよと言う意思表示をしているんだなぁと思うと，また，違った見方も出来ました。
>
> 帰宅してから，何かがいつもと違うのです。食事の片付けも，勉強する姿勢も，私に対する言葉も態度も。一生けん命，自分のできることをしているのです。そして，何でも「ありがとう」と言うのです。正直，驚いています。いつまで，これが続いてくれるのかは？？です。でも，今日の授業で何かを感じたのでしょう。
>
> そして，いつも叱ることが多い私にいつも，変わらないかわいい笑顔を見せてくれるA子に，「ありがとう」と自然と思える，そんな道徳の授業でした。ありがとうございました。

子ども，保護者，教師が授業参観という同じ空間において，同じテーマで考えをつくることができる時間は，貴重である。だから，本校では，年１・２回は授業参観で公開することになっている。

保護者の感想の中に，「家族について考えるよい一日になった」とあった。これは，子どもたち以上に考えたということであり，これで授業参観での道徳授業は，成功だと言える。

ただ単に盛り上がりのある授業や見栄えの良い授業を目指すのではなく，子どもも大人も同じスタンスで考え合う授業をつくりだすべきである。そうすることで，保護者が受けてきた形骸化された道徳授業のイメージも脱却でき，子どもたちによりそった日常の道徳教育ができるのではないだろうか。そういう意味でも，授業参観における道徳の授業は，とても意味があるし，意義深い。

授業参観こそ，道徳の授業を。子どもを変える道徳の授業は，親を変える。親を変える道徳の授業は，子どもを変える。それは，教師も変えることになる。この三者が，ともに高みに向って成長しようとする道徳の授業は，授業参観に値するのである。授業参観では，道徳の授業を恐れずに公開してほしい。

道徳ノートの活用　パート１

筑波大学附属小学校教諭　加藤 宣行

１．道徳ノートの必要性

全国の先生方の中で，道徳の時間に子どもにノートを使わせていらっしゃる方はどれくらいおられるのだろうか。アンケートをとったことがないので何とも言えないが，私の把握する限りではあまり多くないように思う。

理由はいくつか考えられる。

・週一時間で時数が少なく，書くこともあまりない。
・書くより話し合いに時間をかけたい。
・何を書かせていいかわからない。
・ワークシートの方が書かせやすい。

実際，私も公立の教員をしている頃に，何度か毎時間の授業を子ども自身がまとめていけるようにファイルやノートの活用を試みたことがある。しかし，その都度なんとなくワークシートをファイリングするのみで，定着しないまま終わってしまっていたという経験がある。

では，やはり道徳ノートはあまり必要性がないのだろうか。ところが，専科で道徳を担当するようになってからこの７年間，様々な学級で道徳ノートを使うようになり，その多様な可能性を再認識しているのである。

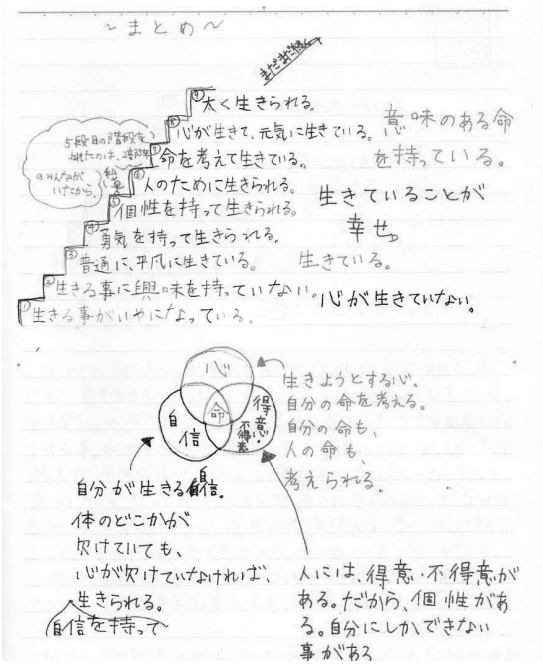
そのような，現時点での私の経験をもとにした話をさせていただくならば，道徳ノートなしにして授業は成り立たないというくらい，必要性を感じている。

> 道徳ノートが好きになってきた。「こういう考えもあるか」「ちょっと変かな」と，色々考えることができる。何よりもそれをもとに実行できるようになることがうれしい。

これは４年生の子どもの感想である。子どもも道徳ノートの必要性を感じている。

２．子どもたちは道徳ノートに何を書くのか

では，論より証拠，実際の子どもたちの道徳ノートをいくつか紹介してみたい。

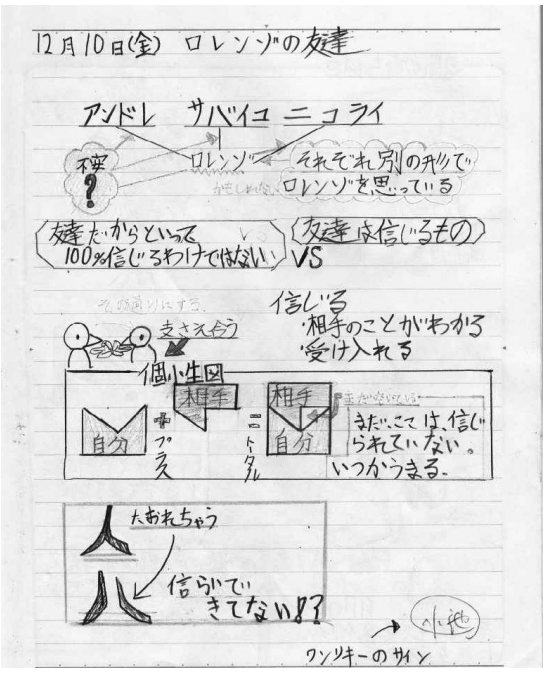


これは，生命尊重の授業の時のＳさんのノートである。板書を写したものではない。全てＳさんのオリジナルである。授業で学習したことをもとに，家庭で自分の考えを図に表してきているのである。一見，道徳の授業のノートではないように思われるかもしれない。

学習する道徳的価値は目に見えない，とらえどころのないものである。しかも，多様な考え方ができる。極端な話，一人ひとりの価値観は違うから，どう考えてもよいことになる。しかし，それでは学ぶものがなくなってしまう。答えがないというのも困るが，何でもありというのも同じことである。そうならないためにも，見えない価値を構造的にとらえる必要がある。図や表は，そのよ

うな構造的把握をするために有効である。図や表の中でも，Ｓさんは好んで階段を使う。ひとつの価値が次第にステップアップしていく過程を表しやすいのであろう。このように，道徳ノートに習熟してくると，一人ひとり自分なりのスタイルが確立してくる。誰一人として同じノートはなくなってくる。

このことは，次のＨ君のノートと比較すれば一目瞭然であろう。



Ｈ君はよく図や絵を描く。もちろん，道徳ノートにである。描きながら，複数の登場人物の関係を明らかにしていく。そうすると，そこに自分と相手という，一般的な人間関係を重ねていくことができるようになる。ともすると抽象的になりがちな思考を，目に見える相関図に置き換えることで，見えないものが見えてきて，気づかなかったことに気づいてくるのである。

もちろん，言葉（文字）でまとめることも大切である。ＳさんもＨ君も，自分なりの図や表で分析した後，最終的に自分の言葉でまとめている。道徳ノートを使うことにより，自分なりのスタイルでまとめることが可能なのである。

３．道徳ノートを使った道徳授業の可能性

他にも道徳ノートを使うメリットはいくつもある。例えば，

○ノートを見返すことにより，授業が終わっても考え続けることができる

授業が終わったからといって，全て理解したことにはならない。特に道徳は，授業後の実践化につながるかどうかがポイントとなる。

○以前の学習を振り返ることができる

毎時間の授業の記録が残っているため，「ああ，これはこの前勉強した内容とつながるね」などと，自然に毎時間の学習内容を振り返り，深めることができるのである。

○家庭教育との連携が可能となる

家に帰ってから，家族と話し合ったり，保護者が自分の考えを書いてくださったりすることもある。

４．書くことによって思考が深まる

他の主要教科では，ノートを使うことが当然のことになっている。では，それらの教科と道徳の違いは何なのであろうか。筑波大学附属小学校で国語を担当している白石教諭は，ノートの役割を「練習・確認・思考」の３つに分類している。漢字練習，計算練習等々の「練習」的な要素は，道徳には少ないようである。しかし，授業で学んだことや大切だと思う言葉を書き留めておく「確認」や，授業や友だちの意見をもとに自分の考えを深める「思考」は，決して一過性のものとして流してよいものではない。

人は書くことによって，自分の考えを確認し，さらに思考を深めていくことができる。私もそうである。この原稿を書きながら，自分の考えを整理しているのである。そうすると，「ああ，自分の感じていたことはこういうことだったのか」と再認識することができるのである。これは，無意識に行っていたことが意識化されたということである。この時はじめて「わかった」ということになるのではないだろうか。

人は言葉で思考し，表現する。学習の上では，自分の考えていることを自分の言葉にできることが非常に大切なポイントである。ノートはその役割を担う。と考えてくると，道徳でも教科のようにノートを使う必要性を感じる。

先ほどは，道徳ノートに「練習」的な要素は少ないと述べたが，私は道徳における「練習」も，ある意味重要なポイントであるのではないかと考えている。誌面が尽きた。続きは次回をお楽しみに。